【改定版】魏√after 久遠の月日の中で

ふぉん氏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

真・恋姫†無双　魏ルート攻略後、五年後に帰還を果たす一刀の物語になります。

「真・恋姫†英雄譚」以降の新キャラは出演しません。

あくまで「真・恋姫†無双」のアフターストーリーになります。

目次

枷のついた帰還 ―― 1
五年間の成果 ―― 11
郷愁を胸に ―― 31
一刀の受難 ―― 44
歌姫の罠 ―― 58
逃走 ―― 71

枷のついた帰還

夜半、通い慣れた道場に足を運ぶ。
中は暗く静まり返っており、扉を開く音だけが道場内に長々と響いた。
電灯を付けようと壁のスイッチに触れたが、なんとなく止めた。
窓から見える大きな満月。
忘れもしない別れの時を連想させる。
五年間、思い返す度悲しみに暮れていた。
しかし、今日は違う。

「やっと……やっと会える」

時計に目を向ける。
約束の時間までまだ余裕があった。
壁に背を預け、目を閉じる。
逸る気持ちを抑え、時間潰しに今日まで足掻いた五年間を振り返る事にした。

現代に戻った俺は、自室で朝を迎えていた。
現代最後の記憶から日にちが進んでおらず、全て夢だったのかと一瞬呆然としたが、身体つきや戦場で受けた傷が、彼女達との出来事が現実である事を教えてくれた。

その日から、慌しい日常が始まった。
昼は学校。
放課後は向こうの世界に行くための調査。
夜は鍛錬。
鍛錬については、その道で知らない人は居ないと言われている祖父が協力してくれた。
そんな日常を高校卒業まで続け、大学進学へ。
この頃から、かなり焦り始めていた。
大学には最低限出席し、残りの時間は調査と鍛錬。
親に小言を言われたのは一度や二度ではない。

そんな中、鍛錬は順調に実を結んでいた。
やはり、祖父の教えが大きいだろう。
しかし、調査は一向に進展していなかった。
数年で全国の手がかりになりそうな所は全てまわり終えた

中国に行けば何か……

そう考え始めた矢先の事。

夜遅く、日課の鍛錬を終えた帰宅途中。

「やっと見つけたわん……ご主人様」

背後から声と気配。振り向くとそこには、半裸の筋肉達磨が居た。
筋肉達磨は両肘をつけてウィンクをしている。
この世のものとは思えなかったが、彼には見覚えがあった。

「お、お前……確か下着店に勤めてた貂蝉だよな……」

「あらん、覚えていてくれたのねん。愛の成せる業かしら」

そう、貂蝉は向こうの世界で下着店の店員として働いていたはずだ。

何故この世界にいるのか。考える間もなく貂蝉に詰め寄っていた。

「教えろっ！どうやってこの世界に来た！どうすれば俺は向こうの世界に行ける！」

「んもぅ落ち着きなさい……と言っても、無理な話よねん」

詰め寄る俺をすんなり交わしてこちらに背を向ける。

「やっとよご主人様。やっと認められたのよ、外史の独立が……」

「認められた……外史……？」

外史？聞いた事が無い単語だ。意味が分からない。

「いいのよ分からなくて。とりあえず、ご主人様は向こう世界に戻れるわん」

貂蝉の言葉を理解した瞬間、疑う間もなく視界が涙で滲んでしまった。

「……もど…れる？本当か、本当なのか…？」

頭に浮かぶ彼女達。この五年間、ずっと思い続けてきた。

「明日のこの時間。いつも鍛錬してる道場にいらっしゃい。私がご主人様を向こうの世界に送ってあげるわん」

バチンッ！とウィンクしながら話す貂蝉。

その言葉を聴いて、目尻の涙が堰を切った。

何故かはわからないが、貂蝉が嘘をついている様には思えなかったのだ。

「貂蝉…ありがとうっ……」

貂蝉に深く頭を下げる。

五年間の足掻きが、報われるのだ。

「……でも、ご主人様にはすこーし我慢してもらわないといけないわん」

「我慢…？」

我慢とは何だろうか。

彼女達と再会出来るなら、殆どの事に耐えられる自信がある。

「詳しくは明日説明するわん。ま・た・ね」

言うが早いか、貂蝉は瞬く間に姿を消した。

これが、つい昨日の出来事である。

「あらん、待たせちゃったみたい。準備は出来てるかしらん」

と、いつの間にか道場には貂蝉の姿があった。

丸太の様な太い腕で、光り輝く何かを持っている。

あれは……鏡？

「準備は出来てるよ。ただ、説明してしてくれるんだろ？」

昨日言っていた、向こうの世界で我慢しなければならない事。

色々と予想してみたが、答えは何なのか。

「……心して聞いてねん。ご主人様」

憂いを帯びた表情で問いかける貂蝉。

覚悟なら既に出来ていた。

「向こうの世界に戻っても、ご主人様は暫く曹操ちゃん達には会えないわん」

「……暫く？」

貂蝉から放たれた言葉。

衝撃は相当なものだったが、思った以上に落ち着いていた。

「取り乱さないのねん。それだけご主人様も大人になったって事かしらん」

驚いた様子の貂蝉。

返事はせず、説明の続きを待つ。

「あの外史に無理矢理亀裂を作って、ご主人様を送るのよん。その後、亀裂を塞ぐことでご主人様は外史の住人になるわん」

外史。

昨日の会話から推測するに、向こうの世界の事を指しているのだろう。

「でもん、外史は亀裂が出来て直ぐ、歪みを正すために原因を排除するように動くのん。あの外史では、ご主人様は既に消えた存在。亀裂を塞ぐ前に曹操ちゃん達に会いでもしたら、外史は直ぐに歪みを感知して……」

貂蝉は言葉を切った。

全てを理解した訳ではないが、向こうに行って直ぐ彼女達に会うとどうなるかは分かった。

恐らく、外史の歪みを正す動きとやらで消えてしまうのだろう。

「……どのくらい、待てばいい」

「全力は尽くさせてもらうわん。それでも、ひと月」

貂蝉の言葉に、顔が強張る。

たったひと月。五年も経った今、然程長いとは思わない期間である。

しかし、手を伸ばせば直ぐにでも届く環境の中、我慢出来るか自信が無かった。

「ひと月か……何とか我慢する。また消えちゃったら元も子もないしな」

俺の言葉に貂蝉は笑顔でサムズアップする。

続けて、持っていた鏡を頭上に掲げた。

「いってらっしゃい！ご主人様！」

鏡から放たれていた光が貂蝉を、俺を、道場を飲み込む。

向こうの世界で待っているはずの彼女達を思い浮かべ、意識を手放した。

枷のついた帰還　了

五年間の成果

気が付くと、一人森の中に立っていた。
近くには川が流れており、過去に聞き慣れたせせらぎが耳を打つ。
深く息を吸う。
肺に満たされる空気は現代のものとは明らかに異なり、彼女達の世界に戻ってきた事を実感させた。

「戻って……これた」

ここはどこなのか。周りを見渡すと直ぐに分かった。
忘れもしない、あの日華琳と別れた場所である。成都と隣接している森の中だ。
これからひと月、どうするか。
軽く思案し、取り合えずは路銀を稼がなければいけない事に気付く。
計画を立てる前に、一先ず街に向かう事にした。

成都の街、大通り。
多くの人が行き交い、場は絶えず賑わいを見せていた。
取り敢えずは現代で買っておいたボールペンを売る事で、まとまった路銀と衣服を入手する事が出来た。
現代の服はこの時代では目立ってしまうので、早々に着替えたかったのだ。
またボールペンを売る際は、足がつかない様行商人には口止め料を払っている。
加えて行商人達から話を聞くことで、色々とこの世界の情勢を掴む事が出来た。
三国同盟が始まり五年が経とうとしていること。
五年の節目という事で、この成都で盛大な祭典が控えているとのこと等。
得た情報を整理していると、腹の虫が鳴り始めた。
ふと空を見上げると、太陽が真上を過ぎている。
こちらに来てからそれなりの時間が経っていた。

「おっちゃん！ラーメン超大盛りでおかわりなのだ！」

元気な女の子の声が耳に入る
視線を向けると、そこにはラーメンの屋台で豪快に麺をすする少女がいた。
あの子は確か、張飛だったかな。
屋台の横に置かれている蛇矛を見るに間違い無いだろう。
彼女の食いっぷりを見て、ラーメンが食べたくなってきた。
屋台に入り張飛ちゃんの横に座る。
彼女は俺に気を止めるでもなく、ひたすら麺をすすっていた。
店主らしき男にラーメンを頼み、張飛ちゃんを見る。
あれから五年が経っているにも関わらず、彼女はまったく変わっていなかった。
小さい体に肩にかかる程の赤い髪の毛。強いて言うなら、顔つきが少し大人っぽくなっただろうか。

「……そんなにじーっと見ても、このラーメンは鈴々のなのだ」

気が付くと張飛ちゃんは箸を止めており、丼を俺から隠す様に威嚇していた。

「ごめんごめん。あんまり食いっぷりが良いから気になったんだ。自分の分はちゃんと頼んでるから」

「ふーん。なら別にいいのだ」

理由を聞いて興味が無くなったのか、張飛ちゃんは再び食事を再開した。

今の季衣もこんな感じなんだろうか…

豪快にラーメンを食べる張飛が季衣と重なる。少し物思いに耽っていると、注文のラーメンがやってきた。

箸をとり一口すする。うん、おいしい。大盛にすればよかったな。

「お兄ちゃん、どこの国の武官？」

「え？」

いつの間にか超大盛りラーメンを食べ終えていた張飛ちゃんが、俺の事をじーっと見つめていた。

「……どうしてそう思ったの？」

「鈴々も武官なのだ！だからお兄ちゃんが強いってわかるのだ！」

胸を張って言い張る張飛ちゃんに、俺は笑いが零れる。

「そっか。でも俺は武官じゃない。一応昔、魏に勤めてたけどね」

「魏の人？なんで成都にいるのだ？」

「……色々あってね。今は三国を旅してまわってるんだ」

「そうなのかー……」

むーと唸る張飛ちゃん。
ラーメンが食べ終わったので勘定を済まし立ち上がる。
「じゃあ、お暇させてもらうよ」
「待つのだ!」
張飛ちゃんは急いで立ち上がり蛇矛を担ぎ上げた。
興奮した面持ちで俺と対峙する。
「鈴々と勝負するのだ!!」
「……な、なんで?」
困惑しながらも理由を問う。
「お兄ちゃん、鈴々が今まで会った男の人の中で多分一番強いのだ。鈴々の知ってる強

い人はみんな女の人だから、どのくらい強いのか気になるのだ！」

なるほど。とても無邪気で単純な理由だった。
確かにこの世界の名立たる武将は、自分の知る限り全員女性になっている。
張飛ちゃんの興味を引くのも納得がいった。
丁度良い機会かもしれない。
勝てる等と奢った考えは持っていない。
ただ、この五年間で俺がどの程度彼女達に近付けたのか確かめる事が出来るはずだ。
少なくとも、張飛ちゃんの目に止まるくらいには強くなれたみたいだが。

「りんりーーーーーん!!!!!」

大きな声に思考が中断される。
城方面から凄まじいスピードで長い黒髪のサイドテール女性がやってきた。
彼女は確か、関羽。
大きく揺れる美しい黒髪に見惚れてしまう。
美髪公とはよく言ったものだ。

「鈴々！また仕事を怠けてこんなところに！いい加減戻って働いてもらうぞ!!」

「にゃっ！にゃあああああ!!」

関羽さんは俺に目もくれず、張飛ちゃんの耳を引っ張って城へと戻って行った。

「……何だったんだ」

呆けていても仕方が無い。

気を取り直し、これからについて考える事にした。

「こんなもんかな」

日が暮れ、この世界に戻ってから初めての夜。

今日一日かけ、馬の都合や野宿道具等、旅の用意を終える事が出来た。

ひと月の間どうするかだが、取り敢えず陳留に向かう事にした。
華琳達にはまだ会うつもりはない。が、一目でもよいので様子を見たいのだ。
確認が出来たら、ひと月経つまでは陳留を離れるつもりだ。
そのまま滞在して、街中で誰かしらにばったり会ってしまい消えるなんて考えたくもない。
布団に入ると、直ぐに思考が微睡んでいった。思った以上に疲れていたらしい。
乗馬や野宿は五年ぶりになる。明日に備えるため、早々に意識を手放すことにした。

成都を出て数日、漸く魏の領地を踏む事ができた。
道中に立ち寄ったの村々は平和そのもので、活気に満ち溢れていた。
そんな中、嫌な噂を耳にする。
国境付近に、行商人を狙う盗賊の集団がいるらしいのだ。
それなりの被害も出ており、国から討伐部隊も出ているとの事。
悲しいことだが、いくら世が平和になっても浅はかな考えを持つ輩は必ず現れてしまうらしい。

今日の野宿場は森の中。綺麗な小川を見かけたのでそこに決めた。
乾物で胃を膨らまし終え、木を背もたれに焚き火眺める。

うとうとし始めた頃、ふと人の気配を感じた。
体勢は変えず、現代から持ってきた木刀を握り意識を集中させる。
矢を放つ音を耳にする。向かってきた一矢を地に転がり避ける。
急いで立ち上がるが、茂みから二つの影が飛び出し左右から挟撃をかけてきた。
何とか後ろに飛び退き躱し、距離をとる。
追撃はこなかった。声が小さく内容は聞こえないが、挟撃してきた二人がこちらに注意を向けながら話し合っている。
武器を構え、自分から距離を詰めた。
一人に木刀を振るう。構えられた剣を大きく弾き、仰け反った相手に続けざま回し蹴りを見舞う。
勢いの乗った踵が側頭部に当たり、一人が昏倒する。
続けてもう一人の袈裟切りを半身で躱し、頭に木刀を叩き込んだ。
二人目が地に倒れるが、矢に警戒し集中は切らさない。
数秒待つと、気配が消える。諦めて逃げたらしい。

「……はぁー」

大きく息を吐く。こちらに戻ってから予想外の初陣だった。
恐らく、噂に聞いていた盗賊集団の一部だろう。
修行をしていなかったら間違いなく死んでいた。祖父に感謝しなければならない。
と、大きな衝撃音が聞こえ身構える。数瞬後、勢い良く人が飛んできた。
反射的にしゃがんで避ける。飛んできた人は木に当たり、倒れ込む。
横に落ちる弓。どうやら、逃げた盗賊の様だ。
しかし何故……
考える間もなく、殺気を感じ武器を構える。

「ぐぉおお!!」

鈍い音とともに凄まじい衝撃が圧し掛かる。物々しい斧が襲い掛かってきたのだ。
左手で刀背を支え、何とか持ちこたえる事が出来た。

「む？……はぁ！」

声と共に、更に増す負荷。
木刀を傾け受け流す。地に叩きつけられた斧は、轟音と共に砂煙を巻き上げた。
飛び退き距離をとると、遅れてきた怖気。
反応が少しでも遅れていたら、間違いなく死んでいた。
身体が震える。先程の防御で腕は痺れていた。
逃げるか……いや、相手は相当な手練れだ。逃がしてくれるとは思えない。
どうすればこの場をしのげるか。少しの間では何も浮かばず、砂煙が晴れる。
ここで初めて相手を確認し、見覚えのある姿に驚愕した。

「ふん。盗賊風情が私の一撃を受け止めるとはな」

憮然とした面持ちで話す銀髪の女性。
反董卓連合での戦いの際、汜水関で関羽と一騎打ちを演じた猛将、華雄。
華雄さんは斧を構え直した。感じる重圧に嫌な汗が浮かぶ。

「お前の仲間達では物足りなかったのでな。精々楽しませてくれ！」

「待ってくれ！俺は……！」

俺の声に耳を貸す気は無いらしい。凄まじい速度で接近し、武器を振りかざしてくる。

薙ぎ、突き、蹴り、明らかに片手間では扱えない大斧で連撃を繰り出してくる。

一撃の重さもさることながら、隙がまったく見つからず後手に回らざるを得ない。

受け流すのにも限度があり、痺れた腕が悲鳴を上げている。

こうなったら無理にでも…

斧の逆袈裟に合わせ、渾身の力で横薙ぎに木刀を振るう。確かな手ごたえと同時に大斧が宙を舞った。

「ふっ!!」

次の瞬間、腹部に鋭い衝撃が走る。鳩尾に刺さる拳を確認した瞬間、吹き飛ばされた。

地を転がり木に叩きつけられ漸く勢いが止まる。

「ごっ……かはっ……」

遅れてくる苦痛。息も儘ならず、腹を抑え地に蹲る。

武器を弾き飛ばした瞬間、華雄さんは大斧に目も暮れず俺の懐に入り、拳を叩き込んだのだ。

「ふむ。多少は楽しめたな」

斧を拾い近づいてくる華雄さん。このままでは間違いなく殺されるだろう。

勘違いで殺されるなんて御免こうむりたい。しかし、この状況で事実を説明した所で、盗賊の命乞いにしか聞こえないだろう。

窮地を脱するには、この猛将を相手に勝つしかないのだ。

何とか手放さなかった木刀を握り直し、立ち上がる。

「まだ動けるとはな。いいだろう、来い！」

立ち止まり斧を構える華雄さん。攻め手を譲られるのは願ってもない。
軋む身体に鞭を打ち、全力で地を蹴る。
後手に回ってはどうしようもない。反撃の隙を与えない様絶え間なく打ち込む。
何十回と打ち込んだだろうか。全て防がれているが、華雄さんの動きが鈍くなってきた。
やはり大斧を自由に振り回すには多くの体力を要する。武器を持つ腕は小刻みに震えていた。
限界が近いのは俺も同じである。だが意地でも負けるわけにはいかない。呼吸を荒く繰り返し、絶えず斬撃を振るう。

「ぐっ……ええい、鬱陶しい!!」

怒号と同時に、大振りの横薙ぎが迫る。
その孤影をしゃがんで躱し、振り切った斧を上に打ち上げた。
間髪居れずに足払い。倒れこんだ華雄さんの首筋に、木刀を添える。

「ぐう……盗賊如きに遅れをとるとは……」

悔し気に俺を睨む華雄さん。未だ勘違いしている彼女を訂正しなければならない。
荒ぶ息を何とか整え、口を開く。

「いや、俺は盗賊じゃないよ。旅をしていてここで野宿しようと思ったら――――

「ほら、飲め」

「ありがとう」

華雄さんから渡された水を口にする。戦いでは強烈な一撃を受けたが、どこかを痛めたりしていなかったのが幸いだった。
今は戦いの後処理を終え、一息ついているところだ。

戦いの後の事。
自分が盗賊出ない事を説明した後、気を失っている盗賊達を拘束した。

すると、華雄さんが森奥へと姿を消し、少し経った後十数人の盗賊を縄で引き摺り戻ってきた。

俺と戦う前に、倒していたらしい。

その後、華雄さんは俺に謝罪し自身について教えてくれた。

どうやら仕事で三国の盗賊を討伐して回っているらしい。

今回も、噂を聞きつけ討伐をしていた矢先の出来事だった。

「そういえば、まだ名を名乗っていなかったな。私は華雄、三国最強の武将を目指している。先ほど説明した通り、今は悪党共を駆逐して回っている」

名前……正直に名乗るのはやめておこう。

華雄さんが天の御使いを知らないとは限らない。

「……俺は郷。今は気ままに旅をしてるけど、数年前までは魏で働いてた」

「魏に？なるほど、武将としてか。であればその武も納得がいく」

何やら勘違いされたが、訂正はしないでいいだろう。
武将に間違われるとは気分が良い。五年間の鍛錬は、確実に実を結んでいた。
「ところで郷の得物は木刀の様だが、あそこまで私と打ち合い何故折れなかったんだ？」
興味津々といった様子で木に立てかけた木刀を見る華雄さん。
「気で補強しているからね。ずっと使ってたものだから気が馴染み易いらしいんだ」
現代で子供の頃から使っていた木刀である。
この五年間、基本的な鍛錬だけではなく、気の扱いも学んでいた。
「ほぉ……気で肉体を強化するのは珍しくないが、得物に籠めるとは珍しいな」
と、華雄さんが大きく欠伸をした。
盗賊の襲撃からかなりの時間が経っている。空は変わらず暗闇を保っているが、日の出までの時間はそう長くないだろう。

「すまんがここで寝させてもらってもいいか。野宿の準備をしていなくてな」

「構わないよ。寝ずの番はしてるから」

「いらんだろう。何かあったら勝手に目が覚める」

華雄さんは木を背にして座り目を閉じる。すると、数秒後には寝息をたて始めた。どんな環境でも眠る事ができ、有事の際は即座に目を覚ます。流石は戦乱を経験した武将だな。

俺も荷物を枕に横になる。戦いで疲れたせいか、何かを考える前に眠りに落ちていた。

「陳留に行くのか?奇遇だな。私も今回の件を報告しに陳留へ向かわねばならんのだ」

盗賊の襲撃があった翌日。捕縛した盗賊達を兵に引き渡すため、華雄さんと共に国境

にある砦に来ていた。
兵とのやり取りを終え戻ってきた華雄さんに、陳留へ向かうと別れの挨拶した所、驚きの言葉が返ってきた。
斯くして、陳留へは華雄さんと共に向かう事になった。

五年間の成果　了

郷愁を胸に

華雄さんと出会ってから数日、順調に馬を走らせ陳留に到着する事が出来た。
馬を預けると、華雄さんは報告のため城へ向かうと言った。
途中まで共にしようと、一緒に街を歩き始める。
町人達の喧騒、見覚えのある街並み。自然と目頭が熱くなり、目元を掌で覆い立ち止まってしまった。

「ん？おい、どうかしたか？」

「……いや、何でもない。急に立ち止まってごめ……ん……」

華雄さんの声に、首を横に振り返事をする。
が、視界に入った光景に、その言葉も途中で途切れてしまう。

「隊長ー！堪忍してぇな！ここで買わなかったら絶対後悔するんやー！」
「沙和もなの！隊長！一生のお願いなのー！」
「駄目だ！ほら、早く次の区画に向かうぞ！」
「そんなー！慈悲は！慈悲はないんかー！
「隊長！お慈悲なのー！」
「今は仕事中だ！慈悲も何も無い！」

隊長と呼ばれた一人の女性が、泣き喚く女性二人の首根っこを掴み引き摺りながら人波に消えて行く。

「凪……真桜……沙和……」

五年前と変わらない懐かしいやり取りを目にし、涙が止め処無く溢れてくる。

凪が、隊長と呼ばれていた。凪の真面目な性格ならば適任だろう。

真桜と沙和は未だに仕事をサボる癖がある様だ。警備隊に復帰したら、凪と一緒に鍛え直さなければならないな。

しかし、元気そうで本当によかった。

「……大丈夫か?」

「……急にごめん。大丈夫だから」

涙を拭う。

怪訝な顔をした華雄さんに謝り、再び街を歩き始めた。

城門前に着いた。立ち止まり外観を眺め郷愁に浸る。恐らく、ここに華琳が……
しかし中には入れない。今彼女と再会してしまえば、今度こそ永遠に会うことが出来なくなってしまう。
短い間だったが、華雄さんとはここまでの様だ。

「郷はどの位陳留に留まるんだ?」

華雄さんが振り返り尋ねてきた。

「まだ決めてない。用が済み次第かな」

「ふむ、そうか。……短い間だったが悪くなかった。息災でな」

「うん。華雄さんもね」

拳を合わせ別れる。短い間だったが、旅慣れしているだけあって色々と参考になる事があった。

また、ここで別れたのは個人的に助かった。というのも、華雄さんはかなり美しい女性に分類されるが、当人にその自覚が無いため何度か困る場面があったのだ。
詳しくは割愛させてもらうが、この数日間悶々と過ごす羽目になっていた。

「さて……」

とりあえず宿を確保するため、宿舎に向かう事にした。

「……そう。よく働いてくれたわ。ご苦労様」

陳留の城内、玉座の間。
国境付近の盗賊集団の件について報告を聞き終え、華琳は微笑み華雄を称えていた。

「で、使えそうな輩は居たのかしら」

華琳が華雄に課した任。各国を旅してまわり、盗賊等悪事を働いている者達を討伐する事。
しかしその他にも命が下されていた。
それは、人材の調達。
盗賊等討伐した者の中に有能な者がいた場合、捕縛し投降させる事。
また、旅をする過程で見つけた場合は国へ斡旋する事。
平和な世で優秀な人材が埋もれてしまわないための配慮だった。

「悪漢共の中にはいなかった。だが、一人面白い奴に会った。武だけなら私より……い、いや、私にほんの少し及ばない程度だな」

「なるほど。取り立てるには十分な実力よ。その者の名は？」

「郷という男だ。華琳ならば知っているのではないか？昔魏に勤めていたと本人は言っていたぞ」

華雄の言葉に華琳は眉をひそめる。郷という名前に聞き覚えは無い。

そもそも、彼女の記憶に過去登用しており現在魏を離れた有能な者は存在しなかった。

「……知らないわね。で、そんな男を見つけて貴方は何も伝えず別れたのかしら」

「いや、郷も偶々陳留に用があるみたいでな。共にここまで来た」

「そう。なら後で遣いをだしておくわ」

華琳はそう言うと、悩ましく溜息を吐き兵を促す。

と、その兵は華雄に竹簡を渡した。

「来てもらって早々で悪いのだけど、貴方向けの急務がさっき舞い込んできたの」

受け取った竹簡を開き読む華雄。

全て読み終えた後、竹簡を懐にしまい口を開いた。

「別に構わんさ。明日にでも向かおう」

「助かるわ。その任が終わったら、貴方には長い休暇をあげる」

「構わんと言っているんだが……まぁいい。準備が必要なのでな。これで失礼するぞ」

玉座の間を後にする華雄。華琳は退出を見送った後、兵を呼びつけた。

「申し訳ありません。本日は満室でして……」

「そうですか……分かりました。ありがとうございます」

日が沈んでから大分時間が経った。

宿舎を巡って三件目。どうやらここも満室らしい。

我慢出来ず、宿をとる前に街を渡り歩いてしまった自分を恨めしく思う。

宿舎を出て立ち止まる。
覚えのある宿舎は全て確認した。どうしたものかと考えていると、肩を叩かれた。
「郷。こんなところに突っ立って何をしている」
振り向くと、先ほど別れたばかりの華雄さんが居た。
華雄さんは何も感じてない様だが、拳を合わせ別れの言葉を交わした手前、直ぐに再会するとなると恥ずかしかった。
が、会ってしまったものは仕方ない。事情を説明する。
「華雄さん……。実は宿が取れなくてさ。どこも満室みたいなんだ」
「こんな時間にとれるわけないだろう。陳留は三国でも一二を争う程活気のある街なのだぞ。宿舎など行商達ですぐ満室になる」
呆れた様子で溜息をつく華雄さん。返す言葉もない。

「仕方ない。私の部屋に共に泊まるがいい」

華雄さんが今出たばかりの宿舎を指差す。

「え、いやそれは流石に……」

「寝台は二つあったから寝る場所には困らんはずだ。それとも陳留まで来て、野宿でもするつもりか？」

陳留まで来て野宿……

「……ごめん。お願いしていいかな」

「ふん、かまわん」

結局お言葉に甘える事にし、宿舎に入る華雄さんに着いていった。

部屋に入ると、華雄さんは早々に旅支度を始めた。
不思議そうに見つめる俺に気付いた華雄さんは、机に置かれた竹簡を指差す。
開き書かれた内容を読み上げる。

「呉との国境付近で盗賊団の情報……か」

「あぁ。急務みたいでな。明日にでも発つつもりだ。明日以降この部屋を使いたいのであれば好きにしてくれ」

「……うん。ありがとう」

一日すら休みをとらない華雄さんが心配になるが、仕事ならば仕方が無い。
と、宿舎の店主が部屋に訪ねてきた。何やら俺に用があると城の兵が来ているらしい。
正体がばれたのかと肝が冷えたが、どうやら違うらしい。
華雄さんの報告を聞いた華琳が、俺を登用しようと遣いをだしたとの事だった。
まさか華雄さんが俺の事まで報告しているとは、偽名を使っていて本当に良かった。

遣いの兵に明日城に来るよう言われたが丁重にお断りし、代わりに伝言をお願いした。

「てっきり古巣に戻る事が用事だと思っていたが、違ったのか」

「そっちは用事というか最終目標というか……まぁ、色々あるんだ」

俺の言葉に首を傾げる華雄さん。しかし困った事になった。

思わぬ形で華琳の興味を引いてしまった様だ。保険はかけたが、あの華琳が大人しくしているとは思えない。

このまま陳留に滞在すれば、再会してしまうのも時間の問題である。

陳留はすぐ発つにしても、どうするか……。

と、先ほど見た竹簡が目に入った。

……断られたら別案を考えよう。華雄さんへと視線を向ける。

「華雄さん。お願いがあるんだけど……」

郷愁を胸に　了

一刀の受難

時は少し遡り、成都。
一刀が成都を離れた次の日の事。
執務室で政務に励んでいた桃香と朱里。
近づいてくる大きな足音に筆を止める。

「桃香様！」

勢いよく扉が開き、愛紗が慌てた様子で執務室へ入ってきた。

「愛紗ちゃん？そんなに慌ててどうしたの？」

「これをご覧になってください!!」

興奮冷めやらぬ様子で手を突き出す愛紗。

その手には、一刀が路銀を稼ぐために売ったボールペンが握られていた。

「これは……？」

「『ぼうるぺん』というものです。これが凄いのです！見てください、こうやって……」

「……わっ！すっごーい！文字が書けてるよ朱里ちゃん！」

すらすらと文字を書く愛紗に、桃香は両手を合わせ驚愕する。

一方、朱里は神妙な面持ちで口を開いた。

「……愛紗さん。そのぼうるぺんとやらは、何処で手に入れたんですか？」

「今日城に訪れた商人が、珍しい物と城へ謙譲したんだ。出所については明かさなかったが……」

愛紗の言葉に朱里は眉をひそめる。

「……愛紗さん。その商人を初めに、そのぼうるぺんについて情報を集めて頂けませんか。それと魏と呉に伝達の用意を」

「相分かった。直ぐにでも動こう。では桃香様、失礼します」

ボールペンを朱里に渡し、愛紗が部屋を後にする。

と、桃香はそわそわしながら朱里へ声をかける。

「朱里ちゃん……そのぼうるぺん、どうするの?」

「壊してしまっては大変なので、重要物として保管して置きます」

「えー、私使いたいなぁ……」

「あはは……ご容赦ください……」

口を窄める桃香を尻目に、朱里はボールペンを見つめ考える。

（こんなもの、真桜さんの発明品でも見た事がありません。一体どこから……）

朱里の記憶に、真桜以上の技術者は存在しない。

得体の知れない物の出現に、蜀の宰相は頭を悩ませる事となった。

「そろそろ休憩にするか」

早朝に陳留を出立し太陽が頂点に差し掛かった頃、道中が山間部に差し掛かった所で華雄さんが馬を止めた。

華雄さんの視線の先を見ると、木々に囲まれながらも少し開けた場所がある。

確かに休憩には丁度良さそうだ。馬から降り、岩に腰を下ろし一息ついた。

「しかし驚いたぞ。郷が仕事を手伝いたいなどと言い出した時は」

そう。俺は今、華雄さんと共に盗賊団の討伐に向かっていた。

昨夜、華琳からの呼び出し断った後に華雄さんにお願いしたのだ。

再会が許されるまでの時間、彼女達のために何かしたいと思ったためだ。

急な申し出にも関わらず、華雄さんは了承してくれた。

「込み入った事情があってね……今は話せないけど、近いうちに必ず説明するよ」

「余計な詮索はせんよ。長い間一人旅だったからな。連れが居るというのも、やはり新鮮で悪くない……ん？」

会話の最中、華雄さんは俺の背後へ目を止めた。

釣られて後ろを向くと、切り立った崖にぽっかりと空いた大きな穴があった。

「洞窟？」

山間の洞窟。
盗賊等、姿を隠そうとする者達が根城にする事が多い場所である。

「ふむ、この辺りで悪い噂は聞いていないが、一応調べてみるか」

斧を持ち洞窟へ向かう華雄さん。
最小限の荷物を持ち、置いて行かれない様急いで後を追った。

洞窟の中は比較的明るく、松明の必要がなかった。
天井や壁から差し込む日の光が光源となっていたのだ。
人の気配を全く感じず、歩み進めて数刻程経った。
これ以上進んでしまうと、戻るのが大変だ。

「華雄さん。ここは問題なさそうだ。引き返そう」

「……そうだな。戻ろう」

少し前を歩く華雄さんが振り返り、こちらへ歩いてくる。

ポチッ

「……何の音？」

「何だこれは？」

華雄さんの足元が不自然に沈んでいる。
足を離すと、地面の一部分が正方形に隆起した。
これは……スイッチ？
突然、地鳴りと共に洞窟が揺れる。

「ッ！何が起こった！」

「華雄さん！前！」

前方から転がってくる巨大な岩。
身の丈の数倍はあり、地にバウンドする毎に洞窟全体が揺れていた。

「ふん、面白い」

斧を構える華雄さん。まさか……

「無茶だって！逃げないと……」

「やってみなければわからんだろう。それに、もう遅い」

巨大な岩は既に華雄さんの眼前に迫っていた。
急いで向かうが、間に合わない。

「おぉおおおおおおおおお!!!!!!!!」

横の一閃。
あまりにも速く、その孤影すら朧気にしか見えなかった。
大きな破砕音と共に、砕け散る岩。
しかし

「んなッ！」

華雄さんが破壊した岩の破片が、後ろに居た俺に降り注いできた。
急ぎ木刀を構える。
大きな破片は弾き、小さな破片は砕く。数が多く全ては処理しきれなかったが、擦り傷程度で難を逃れた。

「す、すまん！大丈夫か！」

「死ぬかと思った……」

慌てた様子で駆け寄る華雄さん。

返事のついでに文句の一つでも言おうと、歩み寄る。

「大丈夫。でも少しは考えて……」

ポチッ

……嫌な音が聞こえた。

言葉を止め、自分の足元を見ると、先程の華雄さんと同様不自然に地面が沈んでいた。

再び、地鳴りと共に洞窟が揺れる。

「……ごめん」

「ふ、これでお相子だな。逃げるぞ！」

二人で駆け出す。

道なりに全力で走る。

岩との距離はどんどん詰まっている。

と、前方に出口の光が見えてきた。

「飛び込め！」

華雄さんと共に外へ飛び出す。
地に滑ると思いきや、浮遊感が体を包む。
何故か。単純な話、地面が無かったのだ。
空に悲鳴を響かせながら、俺と華雄さんは落ちて行った。

背に衝撃を受け、身体が沈み込む。
肺から空気が絞り出されるが、呼吸がままならず水中にいる事に気付いた。
必死に四肢をかき何とか水面に顔を出す。

「ぶはっ！……はぁっ……はぁっ……華雄さん！」

「だ、大丈夫だ」

同じく水面から顔を出す華雄さんを見つけ安堵する。
川の流れは緩やかで、沿岸まで泳ぎ一息つくことが出来た。
座り込み息を整えていると、辺りに漂う硫黄の匂いに気が付いた。
少し離れた所。水たまりというには大きいその場所からは、湯気が立ち込めている。
歩み寄ると匂いが一層強くなった。手を入れて温度を確かめるが少し熱いくらいだ。

「ほぉ……温泉か。服も荷物も濡れてしまったし、丁度いいな」

いつの間にか隣にいた華雄さんが、言葉と共に服を脱ぎ始める。

「ちょ、華雄さん！着替えるなら向こうで……」

「固いことを言うな。私の様な無骨者の裸など、興味無いだろう」

半裸になり脱いだ服を岩にかける華雄さん。

見え隠れする胸や秘部から視線を離せず、劣情を催すのを止められない。

「……何を見ている。郷も裸になるといい」

「……はぁ。わかったよ」

態度を改める気が無い華雄さんに、これ以上言っても仕方が無い。
怒張したものをばれない様に服を脱ぎ、華雄さんに遅れて温泉に浸かる。

「んーっ！気持ちが良いな」

「……うん、そうだね……」

両手を上げ伸びをする華雄さん。野ざらしになった胸が、華雄さんの動きと共にぷるんっと揺れている。
凝視する訳にはいかないが、男の性故に視線を向けるのを止められない。
温泉で寛ぐ華雄さんを尻目に、俺は一人悶々とする事しか出来なかった。

一刀の受難　了

歌姫の罠

陳留、執務室。

魏領における内政において最終決定が下されるその場に、ある竹簡をじっと見つめ眉を寄せる華琳の姿があった。

その竹簡は、成都に居る朱里から送られた早打ちが持ってきたものだった。

「ボールペン……ね」

華琳は竹簡と共に渡されたボールペンに視線を移し、呟く。

明らかにこの世界には不釣り合いな代物。もちもん華琳もお目にかかるのは初めてだった。

渋い表情を変えず再び竹簡に視線を戻すが、戸を叩く音に思考を中断した。

「入りなさい」

「失礼します」

華琳が中に入るように促すと、入ってきたのは真桜だった。
真桜の姿を目にし、華琳は少し驚き微笑した。

「丁度良い所に来たわね。貴女に用があったのよ」

「うちに用事ですか?その前にうちの話を先にさせてもらってもいいですか?」

慌てた様に早口で話す真桜。
いつもと違う様子に、華琳は訝しみながらも頷く。

「構わないわ」

「ありがとうございます。今日、いつも通り警邏をしてたんです。そしたら街の人によう分からん事言われまして……」

真桜は頭を掻きばつが悪そうに言葉を止める。
華琳は続きを促そうと口を開くが、止めた。真桜の唇が震えている事に気付いたのだ。
数秒の沈黙を挟み、真桜が再び話始める。
「……『せっかく御使い様が帰ってきたのに、一緒じゃないのか』と」
「……何ですって？」
「うちらもびっくりして、色々聞きまわったんです。そしたら昨日隊長を見たって人がいっぱい居って……」
困惑した表情を浮かべる真桜。
華琳は目を閉じ数秒思案した後、ボールペンを持った。
「貴女への用事なのだけれど、これに見覚えは無いかしら」

「ん……ッ!!か、華琳様!これボールペンやないですか!?」

「やっぱり、貴女も知っているのね。そう、ボールペンよ。成都で行商から献上されたらしいわ」

華琳はボールペンを真桜へ渡した。

真桜は渡されたボールペンをノックし、挙動を観察する。

一通り調べ終えた後、机に置き華琳へと向き直った。

「間違いない。これ、隊長が言ってたボールペンそのものです。うちでも作れなかった、天の国で使われてる筆……」

真桜の言葉に、華琳は頷く。

華琳も一刀がまだこの世界に居た頃、ボールペンについて話を聞いた事があったのだ。

「華琳様!」

大きな声で華琳を呼ぶ真桜。
眉を吊り上げ、力強い瞳で華琳を見つめている。
何が言いたいのか、華琳には直ぐに理解できた。

「……もしあの男が帰ってきてるとしたら、直ぐに私達に会いに来るはずでしょう。……もう少し、情報が欲しいわね」

「今、凪と沙和が聞き込みを続けてます。何か分かったか聞いてきます！」

言うが早いか執務室を飛び出した真桜。
華琳は数秒開け放たれた扉を見つめた後、天井を仰いだ。

「……早く帰ってきなさいよ。この馬鹿」

「ぐッ!!」

唐突に胸に痛みを感じ、馬上で体勢を崩す。
手綱を離さない様に力強く握り直し、何とか落馬は免れた。
馬が嘶き停止する。体制を立て直し、俯きながら乱れた呼吸を整える。
胸を抑える。何故か痛みは嘘の様に引いていた。

「郷!どうした!」

前を走っていた華雄さんが戻ってきた様だ。
馬を横付けし問いかける華雄さんに苦笑いしながら返事をする。

「急に胸が……でももう大丈夫。ごめん」

「……ふむ。もう少しで村に着くはずだ。今日はそこで休むとしよう」

「いや、俺は……何でもないです、はい」

大丈夫だから。と返そうとしたが、目で威圧され叶わなかった。
まだ夕暮れ前だ。本来ならもう少し進み野宿をするはずだった。
足を引っ張ってしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

気を取り直して馬を走らせると、あっという間に村に到着した。
早々に宿をとると、華雄さんは旅路の荷の補充に行った。
俺はというと、宿をとる前にチラシを目にしたため、とある場所に向かっていた。

会場に着く。舞台から最奥の場所をしか確保できなかったが、ほんの少し舞台上を伺う事が出来た。
俺にとっては都合が良い。念のため、陳留で購入しておいた仮面をつける。
夕日が沈みかけた頃、公演が始まった。

「みんな大好きーーー！」
『てんほーちゃーーーーん!!!』

「みんなの妹ーー！」
『ちーほーちゃーーーーん!!!』
「とっても可愛い！」
『れんほーちゃーーーーん!!!』
「数え役萬☆姉妹の舞台、始まるよー!!」
「みんな、最後まで楽しんでねー！」
『ほわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっっ!!!!!』

……相変わらず、すごい盛り上がりだ。
観客の熱気に当てられ、すこしくらりときてしまった。
声援に負けない三人の歌声。五年前と比べ、明らかにクオリティが上がっていた。
歌だけではない。舞台上で繰り広げられる舞。昔には無い妖艶さがあった。
自然と涙が溢れてきた。偶然だが、彼女達の舞台を再び見る事が出来てとても嬉し

い。

どうやら見入ってしまっていた様だ。いつの間にか空は暗くなっており、公演が終了していた。舞台を後にする前に最後の挨拶を行う彼女達。

少し欲が出てしまった。仮面を外し、少しでも彼女達が見えるように舞台を伺う。

と、挨拶が地和に差し掛かった所で、彼女と目が合ってしまった。

不味いと思い急いで目を逸らす。

「ぐッ！……かはッ！」

途端、昼間に感じた胸の痛みが再発する。

胸を抑えながら、急いでその場を後にした。

昼間と違い、今回は痛みが直ぐに引く事は無かった。

多少千鳥足になりながらも、急いで宿に向かう

ふと手を掲げ自分の腕を見ると、腕自体が透けており輪郭が発光していた。

背筋が凍る。この胸の痛み、どうやら彼女達と関係がありそうだ。
貂蝉の言っていた再会が許されるまでの期間。
守らなかった場合、俺は再びこの世界から追い出されてしまう。
ここまで来て、みんなに会えないまま消える訳にはいかない。

宿に着き、部屋に入ると華雄さんが驚愕の表情を浮かべ近づいてきた。

「ご、郷!?お前、き、消え……!?」

「華雄さん!これから俺を探しに人がくるかもしれないけど、匿って欲しい!そうじゃないと、俺は……」

声を荒らげてしまうが、構わず華雄さんに詰め寄る。

「わ、分かった!分かったから落ち着け!」

頭に軽い衝撃を受ける。頭を小突かれたみたいだ。

華雄さんは溜息をついた後、奥の部屋を指差した。

「幸い奥にも部屋がある。郷はそちらに籠っていてくれ。ただ……流石にそんな状態を見ては事情を知らずに看過できんぞ」

「ごめん……少し落ち着いたら、全部説明するよ」

「そうしてくれ」

華雄さんに頭を下げ、奥の部屋に入った。

寝台に寝ころび、目を閉じる。

未だに胸の痛みは引かず、痛みを誤魔化す様に胸を抑える事しか出来なかった。

「郷、入るぞ」

いつの間にか意識を失っていた様だ。華雄さんの声に目を覚ました。

部屋に入ってきた華雄さんは疲れた顔をしていた。どの位時間が経ったのだろうか。

「騒がしい小娘共だった……色々と聞きまわっているみたいだぞ。取り敢えずは追い返したが」

「やっぱり……ありがとう、助かった」

騒がしい小娘共。恐らく張三姉妹の事だろう。

やはり、俺を探すため村を駆け回っているみたいだ。

ふと、胸の痛みが引いている事に気付いた。腕を掲げてみるが、透けているという事もなかった。

安堵から息が漏れる。取り敢えず助かったみたいだ。

と、華雄さんが俺の寝ている寝台に腰掛けてきた。

「さて、説明してくれるのだろう」

「……うん。ちょっと長くなるけど、いいかな」

華雄さんが頷く。身体を起こし、華雄さんの隣に腰掛けた。
数秒の沈黙を挟み、俺は口を開く。
「五年以上も前の事だよ。俺は今でいう魏の、曹操に拾われたんだ。――――――
歌姫の罠　了

逃走

「……以上が、華雄さんに隠していた全てだよ」

華琳との出会いから、今に至るまでの経緯を全て話し終える。

俯いていた顔を上げ、華雄さんの表情を伺う。

華雄さんは唸りながら、神妙な面持ちで顎を撫でていた。

「むぅ……まさか郷があの天の御使いだったとはな。事情は分かった。出来る限り協力してやろう」

目を閉じ頷く華雄さん。

返事は嬉しいものだったが、少し予想外だった。

「……自分で言うのも何だけど、信じてくれるの？」

「ん？嘘ではないのだろう？」

「そうだけど、こんな荒唐無稽な話信じてもらえるとは思わなかった」

普通に考えたら信じる方が難しい。

華雄さんは再び顎を撫で、困った表情を浮かべた。

「まぁ、先程郷を見たのも理由の一つだが……」

その言葉に、さっきまで自身が消えかけていた事を思い出す。

確かにあの姿を見ていれば、信じてくれたのも多少納得がいく。

「それ以前に、私はあまり頭が働く方では無くてな。自分の直感を信じる事にしているのだ」

華雄さんは言葉を切り、じぃっと俺の瞳を見つめる。

「郷。お前はつまらん嘘をつく様な男ではない。そうだろう？」

「……あぁ、そうだよ」

真剣に問いかける華雄さんは凛々しくも美しく、鼓動が高鳴る。
悟られまいと、まっすぐ華雄さんの瞳を見つめ返し答えた。
俺の言葉に、華雄さんは口角を上げ満足気に頷いた。

「ならば、明日は早朝にこの村を出るぞ。あ奴らがいつ乗り込んでくるか分からんからな」

「分かった。……本当に、色々とありがとう」

話しながら寝台から立ち上がる華雄さん。
感謝の言葉を述べる事しか出来ない事に、言い知れぬ歯痒さを感じる。
ふん。と鼻息をし華雄さんは部屋を後にする。
と、扉に手をかけたところで、華雄さんは振り向き俺に視線を向けたまま動きを止め

た。

「……どうしたの？」

「いや、華琳や霞の好みがいまいち理解出来なくてな。顔は十人並み。武はそこそこある様だが……」

「……俺が強くなったのは五年経った後だよ。前にこの世界に居た頃は、一兵卒にも勝てるか怪しいぐらいだった」

「なんと！ますます分からんな……」

悩みながら部屋を出ていく華雄さん。心の中で同意する。

昔、似たような事を霞に言われたのを思い出した。

この世界で必死に生きていく内に関係を結んだ彼女達。彼女達が俺の何に惹かれたか何て分からない。

が、彼女達が俺を好んでくれている限りは、今も昔もその期待に応えたいと思ってい

る。
まずそのために、今は貂蝉に言われた期限まで彼女達から身を隠さなければならない。
寝台に寝直し目を瞑る。華雄さんとの会話で幾分気が楽になったのか、意識を手放すまでに時間はかからなかった。

早朝。
太陽が顔を出し始め外の暗がりが消えていく中、村の一角にある小屋の中で、三人の女性が卓を囲い向き合っていた。
数え役満シスターズの面々である。
三人とも表情が優れておらず、目の下にうっすらと浮かんだ隈が、彼女らが寝ていない事を示していた。
「状況を整理するわよ」

険しい表情で卓を叩きながら話す地和。
人和が頷き、口を開く。
「ちぃ姉さんが昨日の公演で一刀さんを見てから、今までこの村を捜索したわ」
先日の公演の際、一刀と目が合った地和はしっかりと一刀の事を認識していた。
公演終了後、客席へ駆け出すも既に一刀の姿は無かった。
辺りの客が騒めく中、慌ててついてきた天和と人和に事情を伝える。
二人は最初、地和の見間違いだと信じていなかったが、必死に訴える地和の態度に考えを改めた。
それから三人は、護衛の兵や一部の客を用いて一刀を捜索していたのだ。
「結果、一刀さんと思われる人は見つかってないわ。協力してくれた村の人から聞いた話だと、村の人間は全員確認したみたい」
「宿舎をまわって村の人達以外の人も確認したよー」

人和の言葉に、天和が頬杖をつき口を尖らせながら答える。

「……集めた情報から、分かった事があるの。たまたま華雄がこの村に来てたけど、一人でって訳じゃないみたい」

「え？でも部屋に訪ねた時は一人だって……」

「複数の目撃証言があるの。昨日華雄が若い男と一緒に村に来たってね」

得意気に話す地和に、人和が補足する。

「今この村に居る人は、華雄さんの所以外確認が済んでいるわ。どうして嘘をついているのか分からないけど、確認はしてみるべきね。ただ……」

「分かってるわよ。これでもし違かったら、ちいの見間違いだった事を認めるわ」

地和の言葉を最後に、人和が頷く。

少しの沈黙を挟み、天和がぽつりと呟いた。

「……もし一刀がここに居たとしたら、どうして私達に会いに来ないんだろう」

「……そんなの、本人に聞かなきゃ分かる訳ないじゃない。しょうもない理由だったら許さないんだから」

と、小屋の扉が勢いよく開かれる。

三人が視線を向けると、そこには少し慌てた様子の護衛兵が膝をついていた。

「無礼をお許し下さい。緊急の報告がございます」

「いいわ。話して」

「華雄様が出立の準備を開始しました。また、男が一人共に居る様です」

「なッ！……案内して！直ぐに向かうわよ！」

勢いよく椅子から立ち上がり駆け出す地和。天和と人和も、慌てて後を追った。

朝日が昇り始めた頃。
昨夜華雄さんが言っていた通り、早くに出立するため準備を行っていた。

「気付かれたか」

これから村を出るというところで華雄さんが呟いた。
辺りを見ると、兵士らしき人達が数人、慌ただしくこちらを伺っている。

「まぁ、今気付かれた所で問題は無い。行くぞ」

「あぁ」

馬に跨り手綱を引く。
駆け出そうとしたところで、一人の兵士が駆け寄ってきた。
「華雄様！少々お待ちいただけますでしょうか！地和様が話をしたいと……」
「聞く耳もたん！退け！」
兵士を一蹴し、駆け出す華雄さん。その後ろをついていく。
少し駆けた所で、村の出口に差し掛かった。
「一刀ーー!!!」
名前を叫ばれ、反射的に振り向く。
向けた視線の先に、地和がいた。その後ろには、天和と人和も。
瞬間、胸の痛みが再発する。
俺は彼女達から顔を背ける事しか出来なかった。

「……居たね。一刀」

「……そうね」

華雄と共に村を後にする一刀を目にし、天和と人和が呟く。

二人の少し前には、地和が呆然と立ち尽くしていた。

「どうして?どうしてよ……。意味分かんない……なんで?」

ぽろぽろと涙を零す地和を、天和が駆け寄り背を擦って宥める。

「……落ち着いてちぃ姉さん」

「落ち着けるはずないじゃないッ!やっと……やっと会えたと思ったのにッ!」

言葉をかける人和に食って掛かる地和。
そんな地和を、天和が優しい目で見つめていた。
「一刀、今にも泣きそうな顔だったよ。何か事情があるんだよ。そうじゃなきゃ、私達に真っ先に飛びついて来るはずだもん」
地和は背にある天和の手が震えていることに気付く。
言葉を飲み込み、頷きながら涙を堪える事しか出来なかった。
「……陳留に戻るわよ」
潤む瞳を誤魔化す様に眼鏡をかけ直し、人和が口を開く。
「一刀さんの事、曹操様に報告するわ」
人和の言葉に、天和と地和が大きく頷いた。

逃走了